

02・出会い（スーパーヒロインとは、無差別に人助けするものである）

01の翌日。一月十五日（水）十五時ごろ。

すずらん市・汐見台（しおみだい）。

天気は晴れ。気温は零度程度。外にはそれなりの量の雪が積もっている。さつきまで雪が降っていたのだ。

場所は、青柳家。

主人公、青柳家のリビングにある低いテーブルに、前のめりにもたれ、食べかけのおせんべいを握りしめたまま、真剣にテレビを見ている。

再放送のドラマが、今まさに最終回なのである。

……もうとっくに新しい年は始まつたのに、まるでお正月のようなノリだ。

〈主人公〉

「いやいや、おかしいでしょ」

そんな主人公の傍らには、小さなピンク色のロツドと、金色のティアラが置かれている。

かつて主人公が夢中になつた、変身ヒロインアニメのグッズである。

この作品は、今年で放送二十五周年。

これを記念して、最近リバイバルグッズが売られているのだ。

主人公は、長らくこの作品から離れていた。

だが、一昨日実家から祖父母宅に向かう途中でガチャガチャ販売機を見つけ、懐かしくて……思わず二回ほど回してしまつたのである。

おもちゃ会社の思うつばだ。

〈主人公〉

「えつ、えつ。なんでそらなんの」

現在テレビでは、主人公にとつて意外すぎる展開が進行している。

主人公、白熱するあまり、思わずおせんべいを持つてない方の手でロッドを握りしめ、ぶんぶんと振る。

このロッドの持ち主は、二十五年前から今日に至るまで、ずっと主人公の憧れの女性だ。明るくて、優しくて、誰にでも親切。

困っている人を見かけたら、一も二もなく手を差し伸べる。そんな人物である。

二十五年前、主人公は彼女を大好きになり『大人になつたら、絶対彼女のような人物になる!』と心に誓つた。

だが、実際の自分はどうだろう。

——特に何もせず、テレビドラマに文句を言つてゐるだけである。

そんな主人公を、おばあちゃんは、少し離れた、高いテーブルに座つて見ついている。  
おばあちゃんは、三十近い孫が变身ロツドをぶんぶん振りながらドラマを見ついても、特に何も言わない。

孫の痛いふるまいには慣れっこなのである。

〈主人公〉

「えつ? 嘘。マジ? ほんとにこれで終わり?」

そしてたつた今、ドラマは完結した。

それは主人公にとつて、非常に納得のいかないものとなつたようだ。

具体的には、主人公とヒロインが離れ離れになつたまま終了したのである。

もちろん、これが『よい終わり方』なのかどうかは、主人公だけが決める事ではない。

様々な意見がある事だろう。

でも、とりあえず主人公は気に入らなかつた。

主人公は、二人が結ばれる事だけを信じて、この数時間、テレビの前に座り続けていたからだ。

〈主人公〉

「絶対おかしいって」

なので主人公、食べかけのおせんべいを全部口に放り込むと、怒りを表現するかのことく、バリバリと噛み碎く。

それからガツクリとうなだれる——事もなく、やはり怒り出す。

えっ。ちょっとちょっと、なんだあれ。

なんだあの結末は？

ドラマの主人公はなんかすつきりした顔してるけど、納得いかない。

ヒロインを幸せにする事が、この手の作品の主人公の役目なんじやないのかよ！

主人公、なんだかイライラってきて、ロッドをコトンと置く。

そしてテーブルに向かい——……。

〈主人公〉

「どうかしてるぜ」

と、シニカルに頬杖をつき、ニヒルに吐き捨てるまではよかつたが。

〈おばあちゃん〉

「どうかしてるのはあんたの方だろ」

〈主人公〉

「あたつ」

そこで横から近付いてきたおばあちゃんに、小さなポーチのようなもので、軽くはたかれた。

〈おばあちゃん〉

「テレビ終わつたの？」

〈主人公〉

「うつす。今終わりました。長時間、おテレビありがとうございました」

主人公、突然はたいてきたおばあちゃんを恨めしく思いつつも、うやうやしく頭を下げる。

主人公はおばあちゃんと非常に仲がいい。この通り、何でも軽く言い合える関係である。

〈おばあちゃん〉

「暇なら牛乳買ってきて。あんた料理しないんだから」

〈主人公〉

「あーい」

一言多くないかね。まあ、いいか。

主人公、さすがに急すぎやしないかと思いつつも、素直に頷く。  
自分には、長時間居間のテレビを占拠していた負い目がある。ここは従おう。

それに、元々お使いは嫌いじゃない。外の空気を吸いたい気分でもあるし。  
あと――……。

〈主人公〉

「牛乳だけでいいの？」

〈おばあちゃん〉

「他はメモに書いたから。少しは運動して来なさい」

おばあちゃん、買い物メモが入った小さな赤い小銭入れを、主人公に手渡す。  
どうやら、さつきはこれではたかれたらしい。

〈主人公〉

「わかった。じゃあ、スーパーまで行つてくるね」

主人公、立ち上がりと、コートを取りにリビングを出る。

主人公の足取りが軽いのは、何も、テレビを独占した件について申し訳なく思っている  
からだけではない。

ここから一番近いスーパーには、例の変身ヒロインのガチャ販売機があるかもしれないからだ。

ガチャのラインナップは

- 変身コンパクト
- 武器のロッド
- 変身時につけるリボン
- 強化アイテムのティアラ
- 通信機のブレスレット

の五種類だ。主人公の本命は『変身コンパクト』なのだが、昨日は手に入らなかつた。だからまだ未練がある。

だつてロッドとティアラは、変身していないと使えないじゃないか！

※音声ここから※

S E 1　主人公が青柳家の廊下を歩く足音

【最初から最後まで流す】

**S E 2** 主人公がコートを手に取る音  
【最初から最後まで流す】

主人公、廊下のコート掛けまで歩いて行くと、自宅から汐見台に来るまで、自分が着て  
きたコートを着ようとする。

すると、そこにおばあちゃんがやつてくる。

**S E 3** おばあちゃんの足音

【最初から最後まで流す】

【次第に音量が大きくなる。遠くから、だんだん近づく】

**S E 4** おばあちゃんがコートを手に取る音

【最初から最後まで流す】

〈おばあちゃん〉

【まるで『これくらい着込むのが当然』という調子で】

あんた。スーパー行くならこっち着てきなさい」

〈主人公〉

「えつ」

主人公、おばあちゃんに、

■明らかに大きすぎる白いダウンコート

を渡され『来たぞ!』と身構える。

おばあちゃんとは、とりあえず文江とは、とにかく孫にあつたかい格好をさせたがる生き物なのだ。

これ、ちょっと重装備すぎませんかね。

……あれに似てる。

芸能人が口ケの待ち時間、防寒用に着る、オーバーサイズのダウンコート。

〈主人公〉

「いや、これは……。ここまで着なくていいでしょ」

主人公、やんわり拒否しようとするが、おばあちゃんは引き下がらない。  
それどころか、両手には

■サイズがでかすぎる白の手編みのニット帽

■長すぎる、全部巻いたら首どころか頭まで全部隠れそうな白のマフラー

■装着したら、スマホの操作どころか、コートのジッパーの開け閉めまでままならなくなりそうな白の手袋

まである。

このラインナップはひどい。全部揃えたら、白いもふもふに変身してしまう。  
ていうかなんでいちいち白いんだ。雪原迷彩を意識してるのか？

〈おばあちゃん〉

「有無を言わせずに」

風邪引いたらどうすんの。着てきなさい」

〈主人公〉

「……重すぎるコートもでかすぎる帽子と手袋も長すぎるマフラーも全部？」

〈おばあちゃん〉

「【きつぱりと】

コートも帽子も手袋もマフラーも全部。全部着なさい。靴も出しといたから

……。

主人公、おばあちゃんの指定通りの装備をした場合、自分がどのようなビジュアルになるかを想像し、青ざめる。

日本語では、おしゃれに手を抜きすぎている女性の事を『女をやめている』という事がある。

だが、これらを完全装備した場合、自分はきっとそんなものでは済まされない。

とりあえず『若者をやめている』。だって確實に年齢不詳になるもの。

だけど、逆らうと長引きそうだ。

……おとなしく従おう。

〈主人公〉

「わかったよ、わかりましたよ。あつたかくしてきますよ」

〈おばあちゃん〉

「【満足げに】

そうしなさい」

主人公、観念して、おばあちゃんの目の前で白のダウンコートを着る。  
……重い。普段自分が着ているものに比べて、明らかに重い。

S E 5 主人公がコートを着る音

【最初から最後まで流す】

……一応、聞くだけ聞いておこう。

〈主人公〉

「変じやない？」

〈おばあちゃん〉

「【満足げに『変だ』とはまつたく思つていない】  
変じやないよ」

〈主人公〉

「すごい膨らんでない？」

〈おばあちゃん〉

「【膨らんでいることは認める。方言で『いいでしょ』が『いいつしょ』になる】  
少し膨らんで見える位、いいつしょ」

〈主人公〉

「ていうかなんで全部白なの」

〈おばあちゃん〉

「【特に理由はない】

いいっしょ。全部白でも。あつたかそりゃ

おばあちゃん、言いながら、当然のように白い長靴を指さす。

……やっぱり長靴は白か。どうしてこんなに白で徹底してるんだ。  
確実に白大好き人間だと思われるでしょ……。好きだけど……。

S E 6 主人公が青柳家の廊下を歩く音2

【最初から最後まで流す】

【S E 1と同じ音】

S E 7 主人公が長靴を履く音

【最初から最後まで流す】

〈おばあちゃん〉

「昨日の事を思い出す」

「そういえばあんた。昨日あの後も起きてたっしょ。  
もしかして漫画読んでたのかい？」

〈主人公〉

「そうなのよ！ 面白くてひたすら一気読みしちゃつて」

〈おばあちゃん〉

「だろうと思つた」

〈主人公〉

「しかもレビュー……」

〈おばあちゃん〉

「『『レビュー』』という言葉が何を意味するのか、ピンとこない  
レビュー？」

〈主人公〉

「感想文まで書いて送っちゃつた。だから眠いのなんの……」

〈おばあちゃん〉

「意味を理解して感心する」

はあー。感想送るほど気に入ったのかい。よかつたねえ

〈主人公〉

「ほいだば行つてきます」

〈おばあちゃん〉

「はあい。行つてらつしやい」

〈主人公〉

「いっつきまーす……」

主人公、どよーんとした心持ちはまま、それでもおとなしく

■歩くのには大変すぎるほどでかい白長靴

を履いて玄関を出る。

【最初から最後まで流す】

【ここから、トラック終わりまで流し続ける】

【かなり小さめの音量で流す】

SE9　主人公が玄関の扉を開ける音

【最初から最後まで流す】

SE10　玄関の扉が閉まる音

【最初から最後まで流す】

SE11　主人公が雪道を歩く音

【最初から流す】

【0－5秒ほどまで流してSE12】

【かなり小さめの音量で流す】

SE12　主人公が玄関の柵をあけて閉める音

【最初から流す】

【0－5秒ほどまで流してSE13】

【かなり小さめの音量で流す】

S E 1 3　主人公が雪道を歩く音2

【最初から流す】

【S E 1 1と同じ音】

【かなり小さめの音量で流す】

【0～10秒ほどまで流して次のセリフ】

主人公、こうしてスーパーに向かつて歩き始める。

青柳家を出てすぐのところには小さな公園があり、青柳家を含む周囲の家は、その公園を囲むように配置されている。

スーパーへは、まずはそんな公園の右側、つまり青柳家と公園の間にある坂道を上る。この坂を上り切つたら、今度は右に曲がって、また坂を上る。

さらにそのあと坂を……。という形で、とにかく坂を上りまくつて向かう。距離はそう遠くないが、ちょっとつきつい道のりである。

しかも今日は、全身がかなり重いし……。  
ていうかさあ。

この格好つて……宇宙服……防護服……いや、ハチの巣駆除隊……？

主人公、歩きながら、この格好に適切なたとえを探す。

あ！あれっぽい。白くてでかくて丸い、マリンスタイルの、お菓子みたいなモンスター！。

あるいはタイヤ屋さんのマスコットの、白くて丸いお菓子みたいなやつ。つまりお菓子なのか？今お菓子なのか？わたしは？

とりあえず、お菓子の身体は重い。マジで重い。  
歩くの、思つたよりきついんですけど……。

主人公、思つたよりハアハアしながら歩き続ける。  
しかも、帽子がずり落ちてきた。でかすぎるのだ。

う。帽子のせいで前が見えにくい。

ただできえ未来が見えないのに、視界まで悪くなつてきたぜ……。  
……つうか、未来、見えるようになるのかな。そんな気がしないけど。

今日は一月中旬。本来なら、主人公はとっくに働き始めている時期だつた。  
青柳家には毎年遊びに来ているが、それだつて、普段は二週間前の年末年始が常だつた  
のだ。

さて問題です。

なぜアラサー働き盛りのはずのわたしは、こんな平日の昼間に、おじいちやんおばあちゃん  
の住む町なんぞでフラフラしているのでしょうか。  
それは……。

……ん？

あれつて？

主人公、ふとそこで、坂を上りきつたところに『何か』がいるのを見つける。

それは、小さな塊だつた。

おそらくは人間で、転んでしまつたのか、それとも立てなくなるような何かがあつたの  
か——……とにかく道端に座り込んでいるように見える。

え？ もしかしておじいちゃんおばあちゃんが転んで立てなくなってる的な？  
ヤバいじゃん！

しかも……。

※収録は通常の音量で行う※

※主人公との距離感を表すために、後から非常に小さい音量に編集する※  
※耳を澄まさないと、正しくセリフが聞き取れないほど遠いイメージ※

【怯えて、怖がっている】

嫌……。来ないで。やめて！』

何かされてる？

しかも、思つたより声が若い。これ、女の子の声だよね！

主人公、帽子を慌ててかぶりなおすと、すぐさま走り出す。

自分もまた『女の子』であり、近づけば自分も『何かされる』恐れがある事など、少し  
も頭にない。

とにかく必死だつたのだ。

S E 14　主人公が雪道を走る音3

【最初から流す】

【S E 11、13と同じ音】

【元の速度よりも2倍ほど早くして、走っているように聞こえるようにして流す】

【0—5秒ほどまで流してS E 15】

こうして主人公は、さつきまでとは別人のような速度で坂を上りきり『それ』に近づいた。

すると『それ』は予想通り若い女性で、自分よりも明らかに小柄な、可愛らしい人物である事がわかつた。  
だが――……。

〈主人公〉

「あれ？」

一人しか、いない……？

主人公が『彼女』のところにたどり着き、あたりを見回すと、そこには彼女以外誰もいなかつた。

て事は、わたしの足音を聞きつけて、逃げ出したって事？

と、主人公は考えるが、その気配も感じられない。

『彼女』が見ている方向は行き止まりで、降り積もったばかりの、足跡すらない雪があるだけだ。

そもそもこんな田舎の入り組んだ住宅街で、音もなく逃げ切るなんて、無理である。

……どういうこと？

とりあえず……。

主人公『彼女』に、さらに一步近づく。

すると、彼女が顔を上げて、こちらを見た。

彼女こそが、これから主人公の運命を大きく変える女性『奥平 唯為理（おくだいら  
いり）』だった。

SE15 主人公が唯為理の背中を、ぽんぽんと叩く音

【最初から最後まで流す】

【2回分繰り返して流す】

〈主人公〉

「大丈夫ですか……？」

「突然誰かが近づいてきたので、上手く返事ができない」

あつあつ、あ

対する唯為理、ここまで寄られて、ようやく近くに誰かがいた事に気づく。直前に声をかけられた事には気づいていない。

「取り乱している。ぜえぜえと、苦しそうに、おびえたように息をする

はあつ……はあつ……はあつ……。ひゅーっ……ひゅーっ……ひゅーっ……

唯為理、『ひゅーっ、ひゅーっ』と、呼吸を乱しながら『その人』を見上げ、今まで感じた事もないような気持ちに襲われる。

……だが『その人』の格好が問題だつた。

えつ？

唯為理、フリーズする。

声を聞いていなかつたせいで——突然そばに来た人間が、男性なのかも、女性なのかも、若い人なのかも、お年寄りなのかもわからなかつたのだ。

唯為理、訳がわからないまま、雪の上に座り込んだまま、呆然と主人公を見上げる。でも。この人が何者なのかもわからなけれど。でも——……。

（主人公）

「あつ」

主人公『彼女』が怯えているようなので、ようやく気付く。

そうだ、これじやわたしも変質者だと思われちゃうじやん。

〈主人公〉

「大丈夫。大丈夫です。わたし、坂の下の家のものです」

SE16 主人が帽子を脱ぐ音

【最初から流す】

【0—1秒ほどまで流す】

主人公、そう言つて帽子を脱ぐ。

その瞬間、主人公の髪の毛が白い息と、粒のよくな雪とともに風になびいて、唯為理の目を奪う。

〈主人公〉

「とりあえず、立てそうですか？ そこまで歩けます？」

SE17 主人が唯為理の肩を、ぽん、と叩く音

【最初から最後まで流す】

【かなり小さめの音量で流す】

……とにかく、車が来たら危ない。ここ、人間も車も通る道だし。  
よくわかんないけど、まずは公園まで連れて行つて、そこで休ませよう。  
ベンチの雪は……なんとかする！

【非常に体調が悪いが、それでも心配させまいと、なんとか声を発する。

『立てます』が『立てつます』になる】

あつあつ、はい。立てつます。

【早口で必死に。心配させないために、事態を説明する。

『あの、ごめんなさい』が『あのご、ごめんなさい』になる】

あのご、ごめんなさい。歩いてたら気分が悪くなっちゃって、その】

……ん？

そんな感じには見えなかつたけど……。

主人公、彼女の言つている事が妙に感じられて、思わず尋ねる。

〈主人公〉

「でも今誰か、近くにいませんでしたか？」

唯為理、その言葉にびくつとする。

鋭い。でも、誰かが近くにいた訳ではないのだ。

『あの人気が近くにいるような気がして怖くなつた』だけなのだ。  
実際には、気のせいだつたが……。

「【早口で必死で取り繕う】

いいえ私一人です。

【声が小さくなる。見間違いをした自分が恥ずかしい】  
何（なん）か見間違えた、みたいで……

うん？ 見間違い……？

一体何を何に見間違えたんだ？ この子。  
まあいいや、とにかく今は急がないと。

主人公、今一つ腑に落ちないが、今はこれを追及している場合ではない。  
唯為理に移動を促す。

〈主人公〉

「よかつた。とりあえずそこの公園行きましょう」

「【なぜ公園に行くのかわからない】

へつ？ 公園……？」

〈主人公〉

「ここは車も通つて危ないですから。まず公園で休みましょう」

「【合点がいく。ようやく、主人公が自分をここから移動させようとしている事を理解する】  
あつ」

〈主人公〉

「すぐですかね。大丈夫ですよ」

「【泣きそうになりながら。ようやくお礼を言えるほど、思考が追い付く】

そう、ですね。ここにいたら危ない、ですよね。

そう、します。ありがとうございます……」

SE18　主人公が唯為理の腕を引っ張つて、立たせる音

【最初から最後まで流す】

【少しだきめの音量で流す】

主人公、ひとまずは安全確保のために『彼女』に立つよう促す。手を貸して……というか、腕を引っ張るような形で、立たせる。

SE19　主人公と唯為理が雪道を歩く音

【途中から流す】

【SE11と同じ音】

【11—18秒ほどまで流して、止まって3秒ほどしてからSE20】

こうして、二人はひとまず公園に向かって歩き出したわけだが……。

……ところでわたし、何か忘れていないかね？

主人公、何か重要な事を忘れているような気持ちになる。

そして……思い出す。

ああーっ！

わたし、化粧してない！

と。

主人公、唯為理に『怪しいものではありません』と伝えるため、帽子を脱いだところまではよかつた。

だが、めんどくさいからと言つて、また、田舎の近所のスーパーへ行くだけだからと油断して、まったく化粧をしていなかつた事を忘れていた。

颯爽と帽子を取つたと思つたら、出てきたのはすっぴんの女。  
がつかりもいいところである。

だけど、唯為理の目には——……。

（主人公）

「どうぞ。そこへ座つて」

S E 20 唯為理がベンチに座る音

【最初から流す】

【0—2秒ほどまで流す】

「声が小さくなる。もうほとんど泣いている」

ありがとうございます……」

主人公、とりあえず、できるだけ、はつきり身元を明かして安心させようと、公園のすぐ向かいにある青柳家を指さす。

〈主人公〉

「わたし、今あの家に遊びに来ている、あの家の親戚です。

落ち着いたら、あなたの家まで送っていきます。

まずはゆっくり呼吸して。もう大丈夫ですから」

「早口で。主人公の話はほとんど聞いていない」

「えつ、とんでもないです。」

【とても苦しそう。とても一人で歩いて帰れるようには見えない】

少し休めば大丈夫です。一人で帰れます」

主人公、少しショックを受けつつも、比較的冷静に受け止める。

……あー確かに。

見知らぬ女に家まで付き添わせて、結果的に住所教えるような事したくないよね。  
とは言つても『わかりました。じゃあさようなら』なんて言えるわけないんだけど……。

〈主人公〉

「じゃあ、タクシー呼びましょうか」

〔申し訳なくてたまらず、必死に拒否する〕

タクシーなんてダメです。ほんと、ほんとすぐそこなんで、あの」

……うーん。埒が明かないな。

主人公、弱ってしまう。

こんなにフラフラなのに、妙に強情な彼女を、無事に家に帰すにはどうしたらいいのか?

と。

そして、思う。

わたしが生まれて初めて本気で憧れた女の子は、明るくて、優しくて、誰にでも親切な人だった。

困っている人を見かけたら、一も一もなく手を差し伸べる。そんなキャラクターだった。二十五年前、わたしはアニメ作品で出会った彼女を大好きになり『大人になつたら、絶対あの子みたいな人になる!』と誓つた。

だけど二十五年後の現実は理想には程遠く、わたしはいつも自分にがっかりしてしまう。今だつて、こんなに顔を青くして、呼吸するのもつらそうな彼女に、声をかける事だけはできた。だけど、うまく『助けきる』事ができない。

このままでは彼女に押し切られて、渋々帰る事になってしまいかねない。

それは、したくないのに……。

と、思つていると。

**SE21** おばあちゃんが玄関の柵をあけて、閉める音

【最初から最後まで流す】

【SE12と同じ音】

【最初から最後まで非常に遠い。かすかに聞こえる程度】

**SE22** おばあちゃんが雪道を歩く音

【途中から最後まで流す】

【SE11、19と同じ音】

【20秒地点から終了まで流す】

【次第に音量が大きくなる。だんだん近づいてくる】

※収録は通常の音量で行う※

※主人公との距離感を表すために、後からやや小さめの音量に編集する※

〈おばあちゃん〉

「あれー？ あんたら、何やつてんのさ」

救いの神が現れた。

〈主人公〉

「あ！ おばあちゃん！ えつなんでいんの？」

〈おばあちゃん〉

「方言で『見えたのさ』の語尾が下がって、伸びる】  
窓から見えたのさあ。

二人とも家（うち）入んなさい？

【方言。『寒いでしよう』という意味】

寒いっしょや。

あれえ、唯為理（ゆいり）ちゃん転んだの？ 真っ白んなってえ

助かった！

とりあえず怪しいものじやないって事は、この子に証明できたよね！  
ていうか今おばあちゃん、この子の名前呼んだ？

〔急に知り合いが出てきて驚く〕

あつ……こんにちは。おばあちゃん！

〔少し間をあけてから。ポカンとして。二人が祖母と孫の関係だと理解する。〕

先ほど主人公がさしたのが青柳家であつた事を、今になつて理解する  
あつ？　じやああなたは、青柳さんの？」

……ていうか。うん。

二人は知り合い？　どゆこと？

〈主人公〉

「……おばあちゃん、説明おねがい」

主人公、わけがわからなくなり、おばあちゃんに助けを求める。  
すると、意外な事実が判明する。

〈おばあちゃん〉

「『そういえば』と思い出す」

「ああ！　あんたは会った事なかつたねえ。  
この子があれよ。例の漫画家さん。」

小湊（こみなと）さんちのお孫さん！

【唯為理に対しては、非常に声が優しい】

唯為理ちゃん。これ、うちの孫。

今うちでダラダラしてんのよ。もしかして何（なん）か迷惑かけたかい？ごめんねえ」

もう、おばあちゃん。『これ』って言うなよ。もう。

……でも、おかげさまで、色々何とかなりそう？

主人公、心の中でおばあちゃんに悪態をつきつつも、自分よりもはるかに押しが強く、この場を何とか収めてくれそうなおばあちゃんの存在に感謝する。

何より、知り合いが現れた事で、唯為理の警戒がゆるんだ。

主人公、その事実にとてもホツとする。

そして、唯為理の方を見やると、唯為理が初めて少し笑つた。

……わ。かわいいな、この子。

主人公、思わずそれにドキッとする。

でも、自分の事なのに、なぜドキッとしたのか、よくわからない。  
本当にわからなくて、

きっと、予想外の表情を見られたから、びっくりしたのだろう――――。

と、思う事にする。

ところで主人公は昨日の夜、おばあちゃんに『小湊さんちの漫画家さん』……つまり、唯為理のペンネームを教えてもらい、インターネット検索をした。

それは『松雪(まつゆき) ほたる』というもので、主人公は『やっぱりリアル萤雪の功だつた』『女性作家さんかな?』と、ひとり盛り上がりながら、その名を入力して、検索ボタンをぱちっとした。

『松雪 ほたる』は、主人公の知っている作家さんではなかったからだ。  
そして、出てきたのは――――。

あー。おばあちゃん、言っちゃった。

わたしがこの子の職業知ってるって、言っちゃった。

……昨日は直接会う事もないだろうと思って、勝手に色々調べちゃつたけど。  
もしかすると、あんまりおおっぴらにはしたくない事だつたかもしれない……。

だつてこの子、アダルト漫画家さんだよね。  
紙の漫画雑誌もWEBコミックも、個人で同人活動もバリバリやってる、人気作家さん  
だよね。

ていうか誰だつて、知らない人に『あの人は今○○をしてる』なんて噂立てられたり、  
勝手に知られたりしたくないよね。

……わたしだつて、そうだもん。

だから、知らないふりしてた方がいいのかな。いいよね。  
でも――……。

【比較的落ち着いて。誤解を解こうとする】

違うんです。

【恥ずかしくて嬉しくて、声が小さくなる】

助けてくれたんですね。私の事。

【少し間をあけてから。主人公を見て】

あの。

【少し間をあけてから】

私、奥平 唯為理（おくだいら ゆいり）つて い ま す ……。

【おばあちゃんと苗字が違う事を説明する】

あ、母方の孫なので、苗字は小湊（こみなと）じゃ、ないんですけど。  
青柳さんには、うちのおばあちゃんが、すごくお世話になつてます」

主人公、小さく頭を下げつつ、ポケットの中のスマホの事を思う。

このままフェードアウトして終了。